

丹羽文雄「鮎」論

——〈生母もの〉の虚構性——

田 中 励 儀

初期の丹羽文雄の創作は、通例、〈生母もの〉〈マダムもの〉〈客観小説〉に大別される^①。その中で、「いはゆる文芸雑誌に発表した最初といふ意味」での「処女作」^②、「鮎」は〈生母もの〉の代表作として、作品集に収録される頻度がきわめて高い。丹羽の文学観や創作方法を知るうえでも重要な、本作の虚構を探ることによって、いささかでも丹羽文学の特徴を明らかにしたい。

一

「鮎」は、昭和七年四月「文芸春秋」第十年第四号に発表された。同誌には、川端康成・立野信之・深田久彌・嘉村礒多・細田源吉の諸作が並び、「編輯後記」に「創作欄には新人を網羅した。(略)高い匂ひ新鮮な手触りは、われ／＼を充分満足させてくれるだらう」と謳われているように、丹羽もまた、将来を囑望される新進作家の

ひとりであった。杉山平助から「瀧井孝作ばかりで最初から完成してゐる」^③と賛辞を受け、これが作家として自立する契機となった。

本作は、大学生の津田が、岐阜で守山という男に囲われている生母和緒から入籍の相談を受け、心を配るが、話がこじれて男が自殺した後も動じない母の姿に当惑する、といった筋で、「秋」(昭5・11)「贅肉」(昭9・7)などとともに母子の相克を描いた佳作である。

丹羽にとって愛着の深い自信作であつたらしい。「自分の好きなものだけを選(「あとがき」)んだという、初めての創作集「鮎」(昭10・1・10、文体社)^④でも標題作にしているほどである。反響も大きく、書評も多い。全体的な印象としては、寺崎浩が「見事な巧さを見せてゐる」^⑤とのべ、林芙美子が「うますぎて魂がふるへない」^⑥とのべたように、表現や構成の技巧が称えられる一方、内容的

には、母性と女の矛盾を扱った（生母もの）においても、「どこか興味的な、知のいたづらしか感じられない」とされ、「彼のエロテイズムは実は副産物である」と評された。いずれも、素材にのめり込まない、客観的な作者の視線を感じとったところから生まれた批評であろう。

後年、青野季吉は文学史的な観点から、初期の丹羽文雄を「自然主義以来のリアリズム文学が（略）私小説的なものの中へ流れ出した後を承けて、虚構小説や客観小説のひろい場所へ導いてきた、云はば中興的な存在」と位置づけている。いささか図式的な見解ではあるが、私小説の側面と虚構小説の側面を併せ持つ丹羽文学の特徴を言い当ててはいるだろう。このような特徴を否定的に捉えれば、「私小説の手法で他人を描く（略）根本的な矛盾と、その限界」を説く中村光夫や、「作者の自我の不在」を嘆く奥野健男の所説となり、肯定的に捉えれば、「突き放した眼」で眺める（略）作家の現実認識^⑨」を認める八木義徳や、「自己の反応において、自己を抉るためにとられた「複眼的視線および客観描写の活用」を賞でる河野多恵子の所説となる。

「鮎」において、この二面性はどのように理解できるか。まず、作者の発言を聞いてみよう。「私の小説は、どんなものにも必ず何かしらモデルがある。（略）最初に観念があつて、それに小説的肉

付けをするというやり方を私はとらないのだ^⑩」と、現実を重視する丹羽は、他方で、「現実の中にふかくはいるのでなく、虚構の世界でふかくはいるのである」と虚構への意欲を示している。

本作の津田が文雄自身を、和緒が生母こうをモデルとしているのは周知の事実である。そして、母こうが幼ない文雄を残して旅役者と駆落ちし、その後、岐阜の傘問屋の主人の妾となり、痴情のもつれから男が自殺するという経緯は、おおむね事実に基づいているらしい。しかし、虚構とみられる部分も多い。

関係者の大半が鬼籍に入った時点で刊行された『ひと我を非情の作家と呼ぶ』（昭59・11・30、光文社）は、丹羽が「唯一の告白の書」（あとがき）と公言し、澤野久雄が「私の聞きえた限りでは、ほぼ全部が事実だとのことである」と保証した作品で、文雄やこうが実名で登場する。後年の回想でもあり、すべてを正確な記述と認めるのは早計だが、丹羽の言を信じてとりあえず「事実」と認め、「鮎」との比較を試みた。

まず、守山の自殺である。「鮎」では、母から電報で呼び出された津田が守山との交渉を引き受け、事件後の葬列も目送したと描かれている。しかし、『ひと我を非情の作家と呼ぶ』（以下、『非情』と略す）では、「ある年の帰京のとき、岐阜に寄ると、母の上に思いがけない事件がおきていた」（処女作「鮎」）と、後に事のでん

まつを知ったことが明かされている。そして、「鮎」の執筆に際しては、「自殺事件を中心にして葬儀のようも挿入することにした。それらを媒体として、母と子がたがいにいいたいことを喋り合うという形式がとりたかった」（「同」）とのべ、小説としての構想を披瀝している。つまり、現実の丹羽は葬儀を目にしていなわけであり、守山の死に対する母の実際の反応も知らなかったことになる。

守山が死を選んだ原因は、妻の死後、和緒に入籍を勧めたものの、逆に身を隠されてしまったところにある。その和緒が入籍を拒んだのは、「若しわたしが守山の人間になつてごらん。（略）はたの人達に気がねをして、思ふやうに逢へないぢやないの」(一)というように、息子と自由に会えなくなるのを避けるためだった。この点について、『非情』では「いまさらこの年齢で、従業員の多い家庭にはいつて苦労はしたくないというのが、第一の理由であった」（「私の信仰」）と記され、また、『わが母、わが友、わが人生』（昭60・7・5、角川書店）でも「後妻に入つたらもう地獄の中へ入るようなものだから、（略）それだけの思いです」（「わが母の生涯」）とのべているように、現実には母の個人的な事情が中心であつたらしい。息子への熱い気持は『非情』でも第二の理由としてとりあげられてはいるものの、直後に「私は母親の愛情を、うとましいものと思つた」（「私の信仰」）と率直な反応が示されている。「鮎」の津田が母の告白を

聞いて、「があんとうちのめされ（略）ひねくれた持前の虚弱さが、洗ひたてられたやうな気がした」(一)のとは大きな違いがある。

次に、年齢の問題である。「鮎」では「和緒はまだ四十二歳、津田は十七の時のひとり子である」(一)と設定されているが、小泉譲作成の年譜によると、文雄は「明治三十七年十一月二十二日、丹羽教開（三三）母こう（二四）の長男として生」^⑮まれている。「鮎」が発表された昭和七年の時点では、こうは五十二歳、文雄は二十八歳。「鮎」の和緒は四十二歳、津田は二十五歳だから、作中時間を作品発表時と仮定すれば、津田⇨文雄の年齢はほぼそのままに、母親の年齢のみ十歳も引き下げられた計算となる。母と子が「まるで姉弟だ」(一)とするために必要な設定でもあつたらう。

また、現実には男が死んだ日を特定することはできないが、『非情』で、「早稲田大学に入学して、四日市から東京に通う往復の途中」（「処女作『鮎』」）に聞いたと記されていたように、文雄の大学時代の出来事だったのは確かである。さらに、「鮎」の原型であり、男の自殺が書き込まれている「或る生活の人々」が、昭和二年九月「文芸城」第二巻第二号に掲載されていることを勘案すると、大学入学の大正十五年四月から「或る生活の人々」発表の昭和二年九月まで、一年半の間に限定できる。すると、こうが四十六・七歳、文雄が二十一・三歳の出来事となり、現実の事件に即して考えても

「鮎」の年齢には合わない。

「鮎」では、幼ない津田が泣きだすとあやし方が分からず、自分も一緒に泣きはじめる十七歳の幼な妻の様子が回想されたり、今もなお「若くて、あまりに端麗すぎる」(一)母の容姿が克明に描かれたりするように、はつきりと母の若年化が志向されている。

息子との出会いを大切にしている拒否とした入籍をめぐる虚構、母を若く美しい女に変えた年齢上の虚構、さらに、今後の生活の相談を受けたとする母との対話の虚構——これらは、常に津田のことを考え、細かな話もしてくれる綺麗な母という理想化の現われとして理解できる。

それでは、津田が守山の葬儀を目にしたとする虚構はどのような考えられるか。愛人の死にも取り乱さず、盛大な葬儀を「ちよつと羨しかつたね」と言い、夕食時には平然と健啖ぶりを發揮する母の姿を、津田は「無茶苦茶だ」と思い「持つていきどころのない不満」を感じる。それでもやはり相手が母なればこそであろう、「和緒の守山に対する女らしい気の弱りを見せてほしい」(三)と願うところに、薄情な母の様子をはらはらしながら見守る息子の姿がある。

守山の柩が家の前を通るとき、和緒は津田に「まあ、ちよつとごらんよ、千杜世さんの美しいこと」と声をかけ、白無垢姿の守山の遺児に注意を向けさせる。悲しみに挫かれて伏目がちに進む会葬者

の中で、和緒らの視線を感じたのか、「千杜世の眸だけが、ちらりと二階へ向けられたやうに津田は感じた」(三)。初出誌では「向けられるのを」と断定的に書かれていたのを、単行本化の際に「向けられたやうに」と不確かな形容に改変したのは、和緒が千杜世の父を殺したのも同然と考える、津田のうしろめたさを強調するためだったのかもしれない。

いわば、共犯者意識に近いものを抱いたのだろう。表向き母の行動を突き放しているやうで、実は心情的蜜月を描いたものと読みとれる。「異常に倒錯した親子関係のこまかな陰翳を、若々しく繊細な感覚でとらえたのが、この作品の手柄であろう」とする杉森久英の批評は大筋で認められるとしても、「異常に倒錯した親子関係」というのはあたらぬ。仮に通常の母子にみられる保護―被保護の関係が逆転している傾きがあるとしても、正宗白鳥が「犬ころか何かの生物の母子が、温い日向でじやれ合つてゐるやうに書かれてある」²⁰と評したやうに、おのずから母子の親密な雰囲気があぶり出されてくるのである。それは四歳の時に母と別れた丹羽が求めて得られなかった願ひの実現であり、本作の虚構はこの一点に収斂できる。「鮎」は現実の事件に基づいてはいても、いわゆる私小説からは縁遠い位置にある。

「鮎」が母への憧れを投影した作品であつたとすれば、丹羽文学を語る時によく取沙汰されるキーワード（非人情）とは、一見、矛盾するように感じられる。「鮎」での用例は次の四ヶ所である。

(I) まちがつても和緒は自分の生活を津田に話さない。話されないから津田も持前のひねくれた氣遣ひで、よしその氣ならと非人情に、(一)

(II) 今まであまり子供らしくなく、非人情ぶつて、生意氣でした。

(一)

(III) 津田は自分でも十分非人情であると構へてゐるが、この暗鬱な感じは、理不盡な自殺の事後の咎にちがひなかつた。(二)

(IV) 和緒の非人情なら、当分津田はもう沢山だつた。(四)

(傍点引用者)

このうち、(I) (III) は津田に関わる使われ方である。(I) は今回の入籍話が始まる以前、母が津田に立ち入った話をしてくれない反動で、無理に非人情を装ったところがあり、(III) は入籍を断わるのはお前と逢いたいからだと告げられて、これまでの母に対する非人情を反省した言、(III) は守山の死に動揺を隠せず、非人情を貫きとおせなかつた言である。つまり、津田の（非人情）は生きていくために構えた

虚勢であり、それが破れた後、(IV) では和緒の非人情に閉口の言葉さえ洩らすようになるのである。

「ひと我を非情の作家と呼ぶ」と「非情」を書名にまで採用する丹羽ではあるが、「非情と思われるほどに描かなければ、対象を正確に描き出せない」（「自我の発見」）というのは、肉親に妥協せずに描きたいという方法上の覚悟であつて、作中の津田は決して（非人情）ではない。本作における（非人情）の語は、母を理解し是認しようとして非情の構えをとる津田と、実子への甘えから奔放に振舞う母という、対称の構図を際立たせる役割を果たしている。

料亭の離れで入籍話をするうち、「老後の安定と云ふ物質的な立場」の必要をほめかしながら、最後には「母さんの氣持が肝心ですよ」と身をかわす息子の態度に激昂し、「この薄情もの」と突っかかり、「和緒の小さな拳固が、津田の鼻さきをつゞけさまに飛ぶ」(一) 場面など、この構図の好例といえよう。柔道二段の大柄な青年が血の氣の多い小さな母親を持って余す様子には、ほほえましささえ感じられる。

喧嘩の後、仲居が料理を運んでくる。「鮎の魚田である」。本作の題名にも採られた鮎は長良川名産として夙に有名で、四十二歳の今もなお「豊かな前髪。黒洞々たる瞳」を持ち、「快活と移り氣でむづついでゐさうな、婀娜な母」(一) の象徴にふさわしい。そして、酒。

「酒は富久娘、生一本、母のお酌で盃をあけた」(一)。余談に亘るが、「富久娘」は「灘五郷の西端西郷新在家から送り出されている本造り吟醸²⁴」である。岐阜地方にも、古くから「酒」は長良川の水にて醸す、其水清冽なる故酒味醇厚他製に勝れり²⁵と賞される銘酒があつたにもかかわらず、他県の酒を選んだのは、「富久娘」という名称が母親の若々しさをイメージさせる効果を狙つたのかもしれない。「贅肉」でも「酒は富久娘、半年ぶりの母の酌」と、同様の表現が用いられているように、作者の氣に入った言い回しでもあつたらう。喧嘩の中で母の愛情を感じ、やがてほぐれた氣持が伝わってくる。

このように、対立と融和を繰り返す母子の心理を描くことが「鮎」の主眼といえようが、本作の原型「或る生活の人々」と比較する時、それが一層明確となる。「或る生活の人々」では、津田は章助、守山は津守と名を変えて登場し、和緒は「母」と呼ばれるのみである。津守（守山）の娘千杜世だけは同じ名で現われるが、章助（津田）の幼な馴染みという設定である。舞台は岐阜ではなく章助の故郷とされ、作者と重ねると四日市ということになるが、特定できる記述はない。父の死後、家に津守を泊ませたりする母の不行跡に、章助が不快を覚えるところから作品は始まる。以後、入籍問題の紛糾、男の自殺、母の冷淡な反応、といった大筋は「鮎」に

共通する。しかし、「或る生活の人々」では男と母をめぐる本筋の他に、章助を中心とした傍系の話がある。

—— 大学を出て東京の絢子と一緒になつた章助は、故郷の千杜世にも思いを残し、千杜世が養子を迎えると聞いて心を騒がせる。津守が死んで二七日の前夜、たまたま出会つた千杜世は「何故自殺なんかしたんでせう？」とあどけなく問いかける。母の振舞いを非難されると予期していた章助は、拍子抜けのいで心が軽くなる。そして、秋の挙式を告げる千杜世を思わず抱き寄せ、はじめ抵抗の素振りを見せた千杜世が唇をあずけようとした時に、「何も知らないあんたは莫迦だ」(八)とばかり、一転して鋭く突きつける。上京後、章助の許に痛々しい胸の内を訴えた千杜世からの手紙が届いた。それを読んで、帰省中の夫の背徳を知つた絢子は、衝撃を受けながらも千杜世への思いやりを見せ、章助に「これからもあたしに隠しだしてしちやいや、あ」(十)と甘えるように言う。——

章助が津守の娘千杜世を辱めた振舞いは、「津守の貸は、想像することの出来る中で一番正確な最も残忍な方法で見事に支払つた」(九)とあるように、母の不行跡に手を貸した津守に対する復讐であつたと示される。それでも、省みて自らの行動に不快を覚えた章助は、かえって妻に慰められるかのようなのである。母にも似た多情な章助の行動は、誰からも恨みを買わないという点で、ご都合主義的な扱い

といえなくもない。おそらく、母の奔放な行動に対応する形で、章助の内面をも対象化しようと試みたものであつたろう。しかし、章助をめぐって母・妻・幼な馴染みがそれぞれの比重で絡み合つてくる展開では、短篇小説としては主題が拡散した構成であつたといわざるをえない。

それを自覚してか、丹羽は傍系の筋を切り捨て、血のつながつた母子の心情に話を集中させた。その改作の過程で〈非人情〉の語を見出したのだらう。「或る生活の人々」では使われることのなかつた〈非人情〉をキーワードに据えることで、作品の緊張度が増したといつてよい。複数の人物を示す「或る生活の人々」(傍点引用者)から母ひとりを象徴する「鮎」へ、題名の変更が端的にものがたる集中化は成功した。

三

これまでの分析で、「鮎」が私小説ではなく、充分に考えられた虚構色の濃い作品であることが判明した。では、どのような文体・表現によつて支えられているのか。「原稿紙がまつ黒になるまで直し(略)一字一句に凝つた」という丹羽の努力が酬われて、伊藤整からは「その文章の組み立て方は、ほとんど完璧であると言つてもいい」とまで高い評価を受けた。八木義徳の評言に従えば、「情

緒」というものをまつたく拒否した、硬い、乾燥した、腰のつよい文体で、ギシギシとねじこむように描いてゆく」という方法になろう。確かに、硬質の文体で記される各場面の印象は鮮やかである。しかし、母和緒の行動に翻弄される津田の心情を叙した部分には、唐突と思える表現が散見される。

たとえば、久しぶりに顔を合わせた和緒のどこか元気のない様子を見て、「少しぐいと来るものを感じて津田は目を大きくした」(一)と記される場面と、守山の情欲の激しさを露骨に口にする和緒の話を、どんな顔をして聞けばよいのかと当惑し、「するとこつんと来るものがあつた」(一)と記される場面とではどのように違ふのか。「ぐい」「こつん」の内容が必ずしも明らかではないのである。

同様に、和緒との喧嘩の後、詫びの言葉を発しながらも、

しかし凡そ、詫びるといふ気持とは相違して母の顔を眺めてゐると、朗かな当惑感がごろ／＼と津田の胸の中をころがるやうであつた。何か、やはらかい肉感的な当惑である。(一)(傍点引用者)

と記される場面でも、重ねて説明されているにもかかわらず、「当惑」の微妙な実感^②は伝わつてこない。「朗かな当惑感が」の部分^③は、初出誌の段階では「しばらくちつとかう味ふほどに、ある理不盡な、朗かな当惑だけが」と記されていた。「理不盡」と「朗か」とがど

ういう関係にあるのか、一層不明瞭であり、それゆえ単行本化の際に削除されたものであつたらう。

「理不盡」といえば、和緒から呼び出され、何事かと構える津田に守山との入籍話が伝えられ、「なんだ、そんなことかと安心するものがあつた」(一)と安堵する場面は、初出誌では「理不盡に豁然たるものがあつた」と記されていた。これもまた「理不盡」と「豁然たる」との関係が曖昧で、後に柔らかな表現に改められている。

ここに掲げた数例はいずれも、津田の、母に対する複雑な気持を表わしてはいるが、表現としては生硬で、うまく読者に伝わらない感みがある。

次に、冒頭の表現に着目したい。

海棠と夕顔に雨がふつてゐた。俵屋が母の和緒の手紙をもつてきたので、津田は朝からの苛立つしよざいなさを吹きとばす気で家を出た。(一)

「海棠」は、「長い花柄に(略)淡紅色の五弁ないし半八重咲の花が開く」観賞用の花で、松永貞徳に「人の目は覚る海棠の睡哉」の句があるように、「睡れる花」の異名を持つ。一方、「夕顔」は「夕方開き、翌朝しほむ(略)白い合弁花」で、炭太祇に「夕白やそこら暮るに白き花」の句があるように、「たそがれぐさ」の異名を持つ。それぞれ春・夏の季語でもあり、わが国では古くから馴染みの

深い花であつた。本作の季節は初夏でもあろうか。薄闇の中に灰白い夕顔の花が開き、睡りを思わせる海棠の木にもしめやかに雨が降りかかる。電報で東京から呼び寄せられたのに、肝心の和緒が姿を隠したためにまる一日待たされた、津田の不満と所在なさが、夕方のもの憂い雰囲気と相俟つて巧みに描かれている。写生を主にした風景描写によつて内面を表現する象徴的な手法であらう。

「俵屋」に託された手紙という設定も気にかかる。本作執筆時に近い昭和六年に大阪阪急ビル前で行なわれた一時間の交通量調査によれば、「円タクⅡ六二九、バスⅡ四六七、馬車Ⅱ七九、自転車Ⅱ四二二、モーターサイクル・荷車Ⅱ六五、人力車Ⅱ二六」で、「人力車の不景気ぶりは想像以上のものがあり、その凋落ぶりが察しられる」^②。地方都市岐阜では大阪に比べ人力車の比率は高かつたと思われるが、当時、斜陽の道をたどっていたことは間違いない^③。あえて「俵屋」を持ち出したのは、前の「海棠」や「夕顔」と同様に、やや古風な味わいを出そうとしたのかもしれない。

この冒頭の表現は、一章末尾の「長良橋を津田がかへるとき、金城上の月は高く、あくまで明るかつた」と正確に対応している。この一文は、俵屋の案内で出向いた料亭で和緒と話し、喧嘩するうちに、これまでの疎遠が解消され、馴れ合えた喜びを反映したものである。「長良橋」は、現在、県道岐阜白鳥線の長良川上に架かる

長大橋で、旧橋は大正四年に架橋、老朽化のため昭和三十二年に架け替え工事が行なわれた。本作執筆時に近い昭和九年発行の市街地図に付載された観光案内に「橋上に立ちて眺望すれば金華の翠巒は長良川の清流に倒影して浮べるが如く」と記されるように金華山の北西麓に位置する展望の名所であった。

また、「金華城」は「市のシンボルとしての山」金華山頂に築かれた岐阜城の俗称で、「遠く戦国時代の昔から斎藤・織田と続いたものが、関ヶ原の戦いの後、約三〇〇年間廃城とされていたのであった。明治四十三年模擬城が建造されたことがあったが、それは戦時中の昭和十八年二月十七日、浮浪者のたき火で焼失した」という歴史を持つ。現在の城は昭和三十一年七月に再建されたものであり、津田が目にしたのは焼失前の粗末な模擬城であった。いうまでもなく現実の地理に基づいた表現ではあるが、あえて華やかな語感のある「金華城」を選び、その上に皓々と照り輝く月光を配したことによって、津田の開放感を象徴している。冒頭のもの憂さから一章末尾の明るさへ、心情の展開に技巧的な表現が寄与している。

また、津田を迎えた和緒のそばにうっちゃられていた雑誌が実名で出されていることも気にかかる。「映画と演芸」と「主婦の友」。前者は大正十三年創刊の芸能誌、後者は大正六年創刊の婦人誌で、いずれも大衆向けの雑誌である。「映画と演芸」はかつて旅役者を

追って家を出た和緒の好みを反映したものであろうし、「主婦の友」は愛人の立場にいる和緒が「主婦」の名を冠した誌名を読む皮肉が利いている。それぞれの雑誌を、奔放な愛人生活と着実な家庭生活の象徴と受け取ることもでき、だとすれば、この二誌は入籍の諾否に悩む和緒の心情を暗示したものと見えよう。

息子の津田に相談を持ちかけるうち、ヒステリックになった和緒が投げ捨てた雑誌が、ほかでもなく「主婦の友」だったというのは、正妻の座を放棄する強い意志の表明と考えられる。これは深読みし過ぎるだろうか。雑誌が突き当たった掛軸に書かれていた「模糊として山静かなり花の山」という句が、母の発作にも慣れて「もの静かな、動かない津田のやうす」(一)を象徴しているのは確かなので、あるいは作者の意図的な布置であったかもしれない。

登場人物の内面を表わす風景描写、雑誌や掛軸など小道具の活用、ともによく考えられた象徴的な手法であり、作者の苦心の跡が偲ばれる。ただ、一方で人工的な印象を受けることも事実であり、ときに「理不盡」「朗か」などの難解な表現に当惑させられる。

さまざまな技巧を用いて組み立てられた作品だけに、結末のひねりも利いている。上京の前夜、和緒は津田を「魚鉄」に誘う。そこは守山ゆかりの料亭であり、津田は母の真情を覗き見た思いで微笑する。しかし、「だが、待てよ——。(略)この母は急に鰻がたべた

くなつたのかも判らない」(四と考え直し、嘆息する。和緒の薄情な振舞いの後、一旦、人情味を漂わせて幸福な結末に終るかのようみせながら、最後に判断保留の状態に迷わせる、心憎い展開といえよう。

「鮎」を、作者の体験に基づいた、私小説的色彩の濃い作品と受け取る向きも多い。確かに丹羽文雄と生母こうとの生活歴に裏打ちされていることに間違いはない。しかし、『ひと我を非情の作家と呼ぶ』に記された「事実」との比較、原型作「或る生活の人々」から「鮎」初出誌を経て初版本に至る本文の異同、文体・表現面の分析、いずれからみても思ひのほか虚構色の強い作品であった。作者自身、「事実の上に可能性を加えた。(略)現実の母の上に、自分のあこがれをつけ加えた」と明言するように、現実では望んで果たせなかつた理想の母子関係、ひいては魅力的な女性像を描いた虚構の小説であり、完成された工芸品にもたとえうる巧緻な作品であった。

注

- ① 野村尚吾「評伝的解説」(『現代日本の文学27丹羽文雄集』所収、四四九頁、四五八頁、昭45・6・1、学習研究社)
- ② 丹羽文雄「特装版「鮎」「あとがき」二〇五頁、(昭48・12・10、成瀬書房)

③ 水川烈(杉山平助の筆名)「豆戦艦 四月の雑誌」(『東京朝日新聞』昭7・3・31)

④ 文体社版の「鮎」は五百部限定。一ヶ月で売り切れたため、同十年九月二十五日、双雅房より普及版が刊行され、翌年二月二十日には早くも三版を重ねている。

⑤ 寺崎浩「鮎」覚書」(『三田文学』10-3、昭10・3)

⑥ 林美美子「鮎」へのぶちまけ」(『文学界』2-3、昭10・3)

⑦ 庄野誠一「丹羽文雄小論」私信として」(『三田文学』10-4、昭10・4)

⑧ 注⑤に同じ。

⑨ 青野季吉「解説」(『現代日本小説大系49』所収、三一七頁、昭25・1・20、河出書房)

⑩ 中村光夫「(風俗小説論4) 現代風俗小説批判」(『文芸』7-5、昭25・5)

⑪ 奥野健男「丹羽文雄論—自我不在の文学」(『早稲田文学』19-8、昭28・11)

⑫ 八木義徳「鑑賞」(『日本短篇文学全集42』所収、二六八頁—二六九頁、昭44・2・5、筑摩書房)

⑬ 河野多恵子「丹羽文雄—人と作品」(『昭和文学全集11』所収、一〇六〇頁、昭63・3・1、小学館)

⑭ 丹羽文雄「小説作法」第一章：小説覚書、一一頁、(昭33・9・20、文芸春秋新社)

⑮ 「丹羽文雄選集第一巻」「あとがき」三二五頁、(昭23・7・25、改造社)

⑯ 村松定孝「鮎」(吉田精一編『近代名作モデル事典』所収、五頁—七頁、昭35・1・20、至文堂)

- ⑰ 澤野久雄「解説」(光文社文庫版「ひと我を非情の作家と呼ぶ」所収、二五五頁、昭63・6・20、光文社)
- ⑱ 小泉讓作成「年譜」(「丹羽文雄文学全集第二十八巻」所収、四二二頁、昭51・8・8、講談社)
- ⑲ 杉森久英「解説」(「現代日本文学館37丹羽文雄」所収、四四三頁、昭43・9・1、文芸春秋)
- ⑳ 正宗白鳥(「文芸時評」新進作家論)(「中央公論」50―3、昭10・3)
- ㉑ 長瀬寛二「岐阜美や計」(明23・8・5初版、私家版、未見。昭51・8・1復刻、大衆書房)には、「岐阜名産」として、真っ先に「長良川鮎、鮎鮎、鮎ウルカ、鮎ノ粕漬」(二二頁)を掲げ、鮎の挿絵を付けている。
- ㉒ 主婦と生活社編「吟醸酒全蔵元全銘柄」「富久娘」の項、二九九頁、(昭60・10・15、主婦と生活社)
- ㉓ 岡田文園「新撰美濃志十五之巻」「厚見郡中」三五四頁、(昭6・12・20初版、一信社、未見。昭47・8・25復刻、大衆書房)。本書の成立は天保十四年。
- ㉔ 注⑮に同じ、三一六頁。
- ㉕ 伊藤整「亜流に毒される文体―丹羽文雄氏の文体」(「文学界」10―8、昭31・8)
- ㉖ 注⑫に同じ。
- ㉗ 尚学図書編「花の手帖」「海棠」の項、二三頁、(昭63・3・20、小学館)
- ㉘ 注⑯に同じ、「夕顔」の項、一八五頁。
- ㉙ 斎藤俊彦「人力車」第七章「人力車の衰退、三〇二頁―三〇三頁、(昭54・6・1、産業技術センター)
- ⑳ 同じ昭和六年の岐阜市の統計では、人力車数は一三九台、翌七年には
- 九三台と激減している(「岐阜市史史料編近代Ⅱ」第二部・統計、二二九頁、(昭52・3・31、岐阜市))。
- ㉑ 「岐阜市史通史編現代」第二章「都市の建設、一六五頁―一六七頁、(昭56・11・30、岐阜市)
- ㉒ 「岐阜名勝古蹟案内」(「昭和九年版最新大岐阜市全図」所収、昭9・2・20、博文堂)
- ㉓ 「岐阜市のみどころ」(「最新岐阜市地図」別冊付録「地図の手帖」所収、四頁、昭63・2、ワラヂヤ出版)。なお、金華山は「和歌の名所」(「間宮宗好」美濃雑事記)所収、五二二頁、(昭7・9・30初版、一信社、未見。昭44・9・1復刻、大衆書房)、本書の成立は文化十三年頃として万葉の昔から知られている。
- ㉔ 注⑮に同じ、第六章「観光、五二二頁―五二三頁。
- ㉕ 「うを鉄」は、鱈の名代、長良橋のすぐ下流北岸にある古料亭である事是有名である(「青木令一」「魚田の味―丹羽文雄「鮎」について」(岐阜県ユネスコ協会編「岐阜文学どらいぶ」所収、六五頁、昭41・5・1、同協会))
- ㉖ 丹羽文雄「自叙伝についての考察」創作ノート(「丹羽文雄文学全集第二巻」所収、三九四頁、昭51・1・8、講談社)

〔付記〕「鮎」の引用は、特記した場合を除き、第一創作集「鮎」(昭10・1・10、文体社)所収の本文を底本とし、漢字は原則として新字体に改めた。